

中級日本語学習者のピア・レスポンスを 活性化させる要素 —日本人学生の参加を中心として—

朴 恵美

1. 研究背景

近年、日本語教育における新しい試みとして「協働学習」に基づいたピア・レスポンス(peer response)が導入されている。

これまでの日本語教育におけるピア・レスポンス(以下PR)活動に関する研究では、主に非母語話者同士を対象にして、プロダクト(PR活動の結果としての作文)に焦点を絞ることで、教師添削とPRによる推敲の評価点を比較し、そのうえで、PR活動の有効性を検証してきた。

しかし、これらの研究のほとんどは、PR活動が推敲作文に効果を与えるかどうかについてであり、PRのプロセスに焦点を絞った研究はあまりなされていない。特に、日本語母語話者(以下NS)と非母語話者(以下NNS)におけるPR活動の中で交わされた発話に関する研究はまだ不十分であるといえる。

2. 研究目的と研究課題

池田(2004)は、PR活動の利点、あるいは、その活動の意義を、大きく2つの側面から捉えている。池田は、まず、第二言語を媒介とした学習者にとっての社会的関係性を構築するための「学習環境作り」という意義、次に、「作文の質的向上」を目指すための学習方法としての意義があると述べている。これまでの先行研究では、ほぼ、後者の「作文の質的向上」を明らかにした研究が中心であったが、PR活動そのものにおける研究はわずかである。ここでの「学習環境作り」というのは、学習者が人的、物的リソースを活用して主体的に学習に取り組む、ということを指す。しかしながら、PR活動の重要な意義である「学習環境作り」における研究はあまり進んでいないといえる。

以上をふまえたうえで、本研究では、主に、「学

習環境作り」という視点から、NSの参加を設定した。研究対象となるNNSのグループとNSの参加グループを設定することで、比較考察の素材を得ることとした。したがって、本研究では、NSがPR活動に参加した場合とNNS同士のグループのPR活動にはどのような特徴が現れるか、それぞれの特徴がPR活動を活性化させる要素として影響を与えるかに焦点を当てたい。

研究課題

PR活動におけるNSの参加グループとNNSのグループの話し合い分析

(発話機能カテゴリーという観点)

3. 研究方法

3.1 対象者

本研究は、某大学に在学している中級レベルのNNS及びNSを対象にして4ヶ月間(2008年4月～2008年7月)にわたって実施した。対象者はNNSが7名(中級レベル)で、NSは3名である。

文章表現の授業は週1回の90分授業で、90分のPR活動を6回設け、2週間に1回実施した。PR活動の前に、NNSもNSも自分の作文をメールで全員に送り、それらの作文を読んだ教師が、作文の長さ・内容を考慮したうえでグループを分けた。そのため、毎回グループの構成員が変わる場合が多かった。教師の指示によって、自分のグループの全員の作文を事前に読むことが課された。

グループ編成においては、NS参加のグループはNSが1名とNNSが3名、NNSのグループはNNSが4名に分けた。NSは、1人当たり2回ずつグループに参加した。PR活動は、1人の作文につき、約20分～30分程度を当て、作文の分量は400字から600字にした。

3.2 データ分析の手順と研究の素材

データとして、両グループでおこなった PR 活動での発話を音声テープに録音収集し（4 回分、計 720 分）、これを文字化したものを研究素材とした。（第 1 回と第 2 回は、練習時間にした）

PR 活動における発話機能カテゴリーについてのこれまでの研究は、主にペア（2 人組）を対象としたものが多い。本研究では 2 人以上の人数が研究対象であり、PR 活動の発話データの中でも、グループの全員が参加したものを研究素材とした。PR 活動の中で 1 つの話題に参加者全員が参加し、その話題について合致したと判断しうる場面をすべて抽出し、そこでの発話を研究の素材にした。その趣旨にもとづき、36 の話題の会話（発話文 664）を出した。そのうえで、発話機能をさまざまなカテゴリーに分類した。

データの分類基準は、池田（1999）、原田（2006）、Carol K.K. Chan（2001）の枠組みを参考にし、修正を加え、17 のカテゴリーに再編成して分類した。

4. 分析と考察

4.1 PR 活動における発話機能カテゴリー

ここでは、第 3 回から第 6 回の PR 活動の中でも

最も活発したと思われる 36 の話題の会話（発話文 664）を取り上げ、発話文を 17 の発話カテゴリーに分類した。その結果が以下の表 1 である。下の表 1 は、第 3 回から第 6 回までのピア・レスポンス活動で登場した発話文を 17 の発話機能カテゴリーに分類したものである。また、図 1 は、表 1 の各発話カテゴリーの登場頻度をグラフ化した。まず、表 1 において、両グループを合わせたうえで使用頻度が高い発話機能を順にあげると、⑩「説明する」、⑧「同意する」、③「確認する」の順になる。特に、⑩「説明する」の割合に関しては、本研究で対象としたのが 2 人以上の小人数グループであることが、その原因の一つではないかと考えられる。そのために、書き手が複数の読み手から説明を要求される場合が多かったし、また、読み手も書き手の立場になって「書き手の役割」をする傾向があった。つまり、複数の参加者がいることによって、ペアで行うよりも一方では、書き手や読み手という PR 活動の従来の二つの役割に固執する意識が薄くなり、また他方で、PR 活動における問題を共通のものとして認識することができるようになってきている、といえる。その結果、学習者は、対話を通じて協働的に相互関係を作りながら問題解決に取り組んでいると考えられる。

表 1 発話機能カテゴリーの分類とその登場の割合

	カテゴリー	NNS グループ		NS 参加グループ		計	
①	作文を読む	4	2.0%	9	1.9%	13	2.0%
②	語彙の意味を聞く（WH 疑問文）	9	4.5%	17	3.7%	26	3.9%
③	確認する（YES、NO 疑問文）	26	13.0%	71	15.3%	97	14.6%
④	内容、意図を聞く	8	4.0%	27	5.8%	35	5.3%
⑤	肯定的な感想を述べる	1	0.5%	8	1.7%	9	1.4%
⑥	否定的な感想を述べる	6	3.0%	12	2.6%	18	2.7%
⑦	改善、修正提案する	8	4.0%	17	3.7%	25	3.8%
⑧	同意する	38	19.0%	102	22.0%	140	21.1%
⑨	否定する	1	0.5%	7	1.5%	8	1.2%
⑩	説明する	72	36.0%	128	27.6%	200	30.1%
⑪	反論する	10	5.0%	17	3.7%	27	4.1%
⑫	アドバイスを求める	1	0.5%	8	1.7%	9	1.4%
⑬	判断をする	3	1.5%	13	2.8%	16	2.4%
⑭	訂正をする	6	3.0%	10	2.2%	16	2.4%
⑮	指示をする	2	1.0%	1	0.2%	3	0.5%
⑯	進行を促す	1	0.5%	3	0.6%	4	0.6%
⑰	新しい話題を提示する	4	2.0%	14	3.0%	18	2.7%
	話題 総計	200	100%	464	100%	664	100%

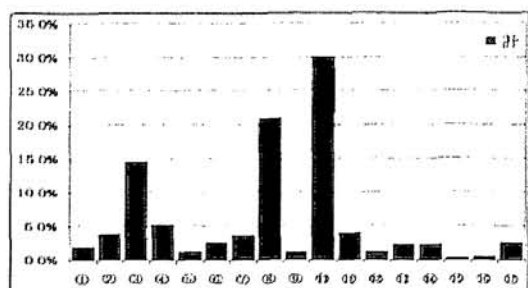


図1 発話機能カテゴリー頻度数

4.2 NS 参加のグループにおける発話機能カテゴリーの特徴

全体を見てみると、研究のソースとした総発話文 664 中、464 が NS 参加のグループによるものである。この 464 の発話文がどのような発話カテゴリーにあてはまるかを分類したのが、以下の図 2 である。まず、頻度の高い発話カテゴリーは、頻度の高い順に⑩「説明する」、⑧「同意する」、③「確認する」だった。次に、最も頻度の低い発話カテゴリーは⑮「指示する」であった。

NS 参加のグループの方で圧倒的に割合が高くなるのが、⑫「アドバイスを求める」、⑬「判断する」のカテゴリーである。表現上の問題や説明に困った時など、NNS より NS に聞く場合が多いためである、と考えられる。

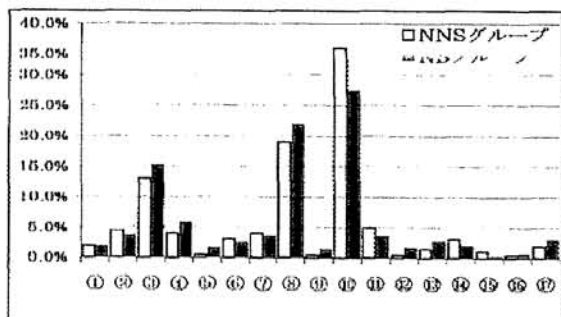


図2 グループ別の発話機能カテゴリー頻度数

4.3 NS 参加者に見られる発話機能カテゴリーの特徴

NS は PR 活動に参加する時は読み手でありながら実際には PR 活動では、「書き手の役割」をすることもかなり多かった。それは、NS が NNS 代わりに、「書き手の役割」を遂行する場合があるからではないかと考えられる。図 3 として示した分析結果で、発話機能カテゴリーの中でも特に⑩「説明す

る」が多かったことから、その裏付けが可能であると思う。

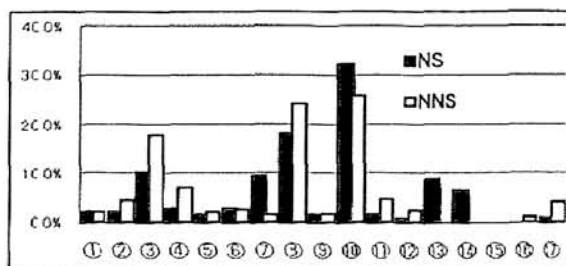


図3 NS 参加のグループ内の発話機能のカテゴリー頻度数

4.4 NNS のグループにおける発話機能カテゴリーの特徴

総発話文数 664 個のうち、200 個が NNS のグループによる発話である。上記の表 2 によると、発話カテゴリーの登場頻度の順に、⑩「説明する」、⑧「同意する」、③「確認する」である。これは、全体を見た場合とも、NS 参加のグループのみを見た場合とも同じ順序である。発話カテゴリーとしては、⑩「説明する」の登場頻度が高くなっていく。しかし、⑩「説明する」が登場する割合は、NS 参加のグループよりも NNS のみのグループのほうが高かった。

表2 NNS グループの発話機能のカテゴリー

カテゴリー	NNS グループ	
①	1	2.0%
②	9	4.5%
③	26	13.0%
④	8	4.0%
⑤	1	0.5%
⑥	6	3.0%
⑦	8	4.0%
⑧	38	19.0%
⑨	1	0.5%
⑩	72	36.0%
⑪	10	5.0%
⑫	1	0.5%
⑬	3	1.5%
⑭	6	3.0%
⑮	2	1.0%
⑯	1	0.5%
⑰	4	2.0%
計	200	100%

表 2 で見られるとおり、NNS のグループにおいて上位 3 つのカテゴリーに次いで登場頻度が高い⑩「反論する」には、200 の発話文のうち 10 個 (5%) が分類された。他方、NS 参加のグループでそれに分類されたのは 464 の発話文のうち 17 個 (3.66%) であった。つまり、⑩「反論する」のカテゴリーに当てはまる発話は、NS のグループに比べて、NNS のグループの方がより多い割合を示した。このような違いが生じたのは、NNS 同士の話し合いの方が、NS 参加のグループのそれよりも、心理的な面でより気楽だったからではないか、と考えられる。

5.まとめと今後の課題

発話文全体を発話機能の各カテゴリーへと分類したところ、高い割合を示した発話機能のカテゴリーの順に、「説明する」(30.1%)、「同意する」(21.1%)、「確認する」(14.61%)という結果となった。「説明する」が、他の発話機能カテゴリーより高い割合を示すのは、PR 活動に参加する人数と関係があるのではないかと、思われる。

分析でも明らかなように、PR 活動においては、「対話」というプロセスを通して可能になる。その対話は、一方的になされるよりも、「対話」に参加した人がさまざまな役割を受け持ち、支援をお互いに行うことで成り立つ。また、その「対話」に参加する人数によっては、参加者がもっと複雑な関係性を持ちうるし、あるいは、対話が協働的に進むこともあるといえる。NS の参加グループと学習者グループとも最初は、相手の説明に「同意する」ことが多かったが、次第に「対話」を通して納得できるまで話し合おうとする姿勢がみられた。そのため、発話機能カテゴリーのなかで、「説明する」が多く使われたと考えられる。

発話機能カテゴリーからみると、36 の会話の中、発話総数 664 であったが、その中で NS の参加グループの発話文は 464 個であったが、NNS グループは発話文が 200 個であった。このことは、NS 参加が PR 活動に学習者を参加させるきっかけになった

ともいえる。そのきっかけが PR 活動を活性化させることに繋がっているのではないかと考える。

このような結果から、まず、PR 活動を活性化するために最も必要とされる発話機能のカテゴリーは、「説明する」であるといえる。次に、発話の話題の数と発話機能のカテゴリーから見ると、NNS のみのグループより NS 参加のグループの方が多いことから NS 参加が PR 活動を活性化にも影響があることが分かった。NS が PR 活動に参加したことから中級レベルの NNS と NS の間にも PR 活動が可能であることがいえる。

PR 活動のなかでも発話機能カテゴリーがどのような役割を果たしているか、PR 活動に参加した NS は PR 活動をどのように評価するかについては今後の研究課題にしたい。

参考文献

- 池田玲子 (1999) 「ピア・レスポンスが可能にすること
中級学習者の場合」『世界の日本語教育』第 9 号
国際交流基金・日本語国際センター・丸人社 29-43.
- 池田玲子 (2004) 「日本語学習における学習者同士の相互
助言ピア・レスポンス」『日本語学』第 23 巻 第 1
号 1 月号 明治書院 36-50.
- 原田 三千代(2006) 「中級日本語作文における学習者の相
互支援活動一、言語能力の差ピア・レスポンスによっ
て負の要因か」『世界の日本語教育』第 16 号 53-
73.
- Carol, K.K. Chan (2001) Peer collaboration and discourse
patterns in learning from incompatible information
Instructional Science 29: 443-479.